

ハイデガー『存在と時間』注解（7）

寺 邑 昭 信

（承前）

ようやく第一部第一篇「現存在の予備的な基礎的分析」に入る。いままでの序論がいわば登山のためのベースキャンプ設営作業だったとすれば、ここから本格的な登山道が始まるわけである。それにしても登山を始めてから、いつ頂上に辿り着けるか見当もつかない遅々たる歩みであるが、*festina lente* 急がば回れで、迷わないように或いは滑落しないように一歩一歩着実に歩を進めて行こう。

なお第一篇のアウトラインは41頁にスケッチされているが、第一篇では、ごく大まかにいって現存在の日常性の分析に基づいて、現存在の存在（存在の意味に非ず）の動的な基本構造が気遣い *Sorge* として解釈し出される。ただしこの分析はあくまで「予備的」「暫定的」な分析とうたわれているように、さらなる解釈のための土台（さらなる先持）なのであり、また第二篇において現存在の存在の意味、つまり気遣いの根拠（時間性）が明らかにされたのち、改めて振り返って解釈内容が再吟味されることとなる。

ちなみにこの第一篇では、（第二篇と大きく異なり…少なくともそう筆者には思えるのだが）ハイデガーの事象に即した周到な解釈作業が面目躍如としており、彼の「事象に迫る」方法としての現象学的解釈学を具体的に学ぶことのできる格好の場である。本注解（1）の「形式的告示」の項でも触れたが、まず現存在から「世界-内-存在」という動的構造が形式的に告示されて、ハイフンで結ばれたその構成契機の各々がさらに解釈し分けられて意味的充実を受け、さらには再統合されていく様をじっくりと楽しんでほしい。

なおこれまでどおり、本文の強調部分は、下線を引いてある。またたとえばGA63/29はハイデガー全集第63巻、29頁を表す。

・041/30-042/1 「この存在者の存在はそのつど私のものである。この存在者の存在において、この存在者はそれ自身おのれの存在へと態度をとっている。この存在の存在者として、この存在者はおのれの固有なかかわる存在に委ねられている。」

「そのつど私のもの」je meines の meines は、所有代名詞（ないし所有冠詞）mein の中性一格を表す強語尾形である。mein は、形容詞的用法として普通名詞に係って「私の」を意味するが（たとえば mein Kind 私の子ども）、ここでは名詞を省略した名詞的用法で使われている。つまり je meines Sein の省略であるから、「私のもの」でももちろん間違いではないが、この訳では、まず「私」という存在者があってそれが自分の存在を所有するといった、ないしは「私の物」といった誤解を招きやすい。ちくま版、岩波版、河出版では、それぞれ「そのつど私の存在である」、「そのつどわたしの存在である」、「各自の有である」となっている。なお本文42頁以下の「私のもの」という訳語も「私の存在」と読み替えるほうが分かりやすくなる。

「そのつど」の原語 je は、もともと「過去もしくは未来の何らかの時点において、かつて、いつか」という意味であるが、転じて人間や事物について、各々の人間や事物ごとの取り分となる数を挙げるために用いられる。そこでニュアンスとしては「いつもそのつど」というより、「それぞれ、どの一人を取ってみても」という意味に近い。だから「その都度」（＝「いつも、毎回、各時点で」を思わせる）というよりも、「その各々が、その誰もが」の方が適訳なのではと思われる。英訳では in each case、旧仏訳では je は特に訳し出していないが、新訳では chaque foi である。

なおこれからの実存論的分析で明らかになるように、ハイデガーは近代哲学のいわゆる主観－客観図式における自我概念や独我論を派生的なものとして批判しながらも（全集第63巻『オントロジー』の第17節は「誤解」と題されているが、その小見出しは「(a) 主観-客観図式」とされ、「**主観と客観、意識と存在があるという図式は遠ざけておかなければならない**」とはっきり述べられている）、実は（実存思想に特徴的な、本来の）「私、自分」にあく

まで固執するのである。

全集第20巻の該当箇所には、以下のように「それぞれ私の存在 das >je meine <」としての「関わる存在 >Zu-sein<」(GA20/206) という表現も見られる。

「私自身がそれである存在者へのこの存在関係は、この『関わって存在すること Zu-sein』を『それぞれ各自の存在 das >je meine<』と特徴づける。この－それであること－という存在の仕方は、本質的に『それぞれ私のそれであること』なのである… (省略は筆者) 自身の意味からして各自的なものではないような現存在としてあるような現存在があったとしたら、それはそもそも現存在ではない。この性格は、現存在が存在するかぎり、抹消しがたく現存在に属している。」(GA20/206)

・042/01-042/02 「存在とは、この存在者にはそれ自身そのつどそれへとかわりゆくことが問題である当のもののことなのである。」

Das Sein ist es, darum es diesem Seienden je selbst geht.

「誰かにとって、何かにかかわりゆくことが問題である」jm um jn, etwas gehen (um をめぐって gehen 行く) は、「大事なものは…である」「が問題である」「がかかっている」という意味であるが、ここでは、現存在にとって自分の存在が問題な事柄、懸案事項の一つというのではなく、まさに自分の存在に関わっているという動的なそして不可避の在り方を指している。なおここでいう「存在とは」は、もちろん「存在一般とは」というのではなく、この現存在という特殊な存在者の「存在」を指している。

またこの文はいわゆる強調構文なので、「この存在者にとって、それ自身が関わってゆくことが問題なのは、他ならぬその存在である」の方が適切か。ちくま版では「存在することこそ、かような存在者自身にそのつど関わりのあることなのである」と強調している。

なお現存在特有の自己へと関わり行く動的在り方を適切に表したものとして、本注解(1)でも触れたキルケゴールの有名な精神の規定を参照のこと。

「人間は精神である。しかし、精神とは何であるか？精神とは自己である。

しかし、自己とは何であるか？自己とはひとつの関係、その関係それ自身に
関係する関係である。あるいは、その関係において、その関係がそれ自身に
関係するということ、そのことである。自己とは関係そのものではなくして、
関係がそれ自身に関係するということなのである。」(S. キルケゴール 梶田
啓三郎訳『死に至る病』ちくま学芸文庫版 27頁)

さらにまた『存在と時間』第4節の以下の箇所も参照のこと。

「現存在は、他の存在者のあいだで出来るにすぎない一つの存在者なの
ではない。現存在が存在的に際立っているのは、むしろ、この存在者にはおの
れの存在においてこの存在自身へとかかわりゆくということが問題であるこ
とによってである。」(SZ S.12)

「現存在がそれへとこれこれしかじかの態度をとることができ、またつね
になんらかの仕方であらう態度をとっている存在自身を、われわれは**実存**と名づけ
る。」(SZ S.12)

042/04「この存在者の『本質』は、この存在者のかかわる存在のうちにひ
そんでいる。」

「かかわる存在」の原語は、Zu-sein である。ドイツ語の前置詞 zu (英語の
to) は、基本的には「方向」を表す。おのれの存在へ向かって関わってゆく
(という仕方である)という事態を、端的に示したもの。(cf. フツサールの「意
識はつねに何かについての意識である」という意識の志向的在り方。)

なお「にひそんでいる」の原語は liegen in であり「ひそむ」というより「に
ある, 含まれている」という程度の意味である。ちくま版も岩波版も「にある」
と訳している。

042/08-042/10「**実存**というこの名称は、**エクシステンティア**という伝承
的な術語がもっている**存在論的な意味**をもってはならず、また、もちえない
ということ、」

伝統的な存在論では、**実存** Existenz の元の言葉、つまり**現実存在**
existentia は、動詞 exsisto (ex 外へ +sistere 立つ = 外へ出て立つ) に由来し、
本質 essentia と対概念で使用され、人間の**現実存在**にかぎらず、一般に目の

前の事物の彼方に位置づけられている本質が外に出て現実化した在り方を意味した（中公版 121 頁訳注（2）参照）。

たとえば、「馬とはかくかくしかじかのものである」というが馬の本質規定であり、現にここにいる具体的な白馬や駿足の馬が、馬の現実存在である。それに対してハイデガーは、実存をもっぱら現存在の事実的な存在に限定して、従来の意味のエクシステンティア *existentia* は、現存在以外の諸々の事物が現実存在する様、事物的な存在を表すものとしてははっきりと区別するのである。

「実存」については本注解（1）の該当箇所も参照のこと。

042/11 「事物的存在」

原語は *Vorhandensein* である。ちくま版では「客体的存在」、岩波版では「目のまえにあること」、河出版では「直前にあること」である。本文のすぐ後に出てくる「事物的存在性」*Vorhandenheit* の訳は、それぞれ「客体的存在」（ママ）、「目のまえにあること」（ママ）、「直前性」である。

vorhanden は、*vor*（前に）と *Handen*（Hand 手）からの合成語であり、もともと「手元で掴める（範囲にある）」といった意味だったが、転じて「手元にある、持ち合わせの、現存する」という日常的な意味を、また *Vorhandensein* は、「存在、現存」という一般的意味をもつようになった（手元から失われる場合は、*ab*「離れて」をつけて *abhanden kommen* という）。ハイデガーはこの言葉を、現存在以外の存在者の存在を表す範疇概念として用いるのである。

ただし厳密に言えば、現存在以外の存在者は、ハイデガーによれば二通りの存在の仕方ないし範疇規定を持ちうるのである。自然科学に代表される理論的態度による規定対象として見られた場合は、事物的存在として（たとえば分析対象としての水）、実践的に使用されている場合には道具存在 *Zuhandensein*（ちくま版は「用具性」、岩波版は「手もとに在ること」、河出版では「手許性」として（たとえば飢えを癒す飲料としての水）ある、というように変容するのである。詳しくは『存在と時間』69 頁以下、73 頁などを

参照のこと。

042/17 「現存在の『本質』はその実存のうちにひそんでいる。」

ここは、上の「この存在者の『本質』は、この存在者の関わる存在のうちにひそんでいる」の言い換えであるが、ここでも「ひそんでいる」の原語は *liegt in* であり、岩波版では「現存在の『本質』は、その実存にあります」、ちくま版では「現存在の『本質』は、その実存にある」、河出版では「現有の『本質』は彼の実存に存する」である。ひそみ隠れているのではなく、まさに現存在の本質＝その実存という在り方だということである。

ハイデガーは、上述のように従来のエクステンティア概念を現存在ではない事物の現実存在にのみ適用し、「実存」という語は、現存在の関わる存在という独自の在り方に使用を限定する。

またここで「本質」としてエッセンティアに代わりドイツ語の *Wesen* が用いられているが、この場合の「本質」は、事物が何であることを示す普遍概念 (cf. 普遍・本質が個物の中に *in re* 存在するといういわゆる概念論) や事物の「固有性」を指すのではなく、現存在から実存という在り方をのぞけば現存在が成り立たない肝心要の根本構造を意味するのである。

現存在以外の存在者 *essentia* ≠ *existentia*

現存在 *Wesen* = *Existenz*

ちなみに、サルトルは、『実存主義とは何か』(1945年)(原題は『実存主義とはヒューマニズムである』)において実存主義者に共通の考えとして「実存は本質に先立つ」という有名な発言を行っている。

「事を複雑にしているのは、実存主義者に二種類あるということである。第一のものはキリスト教信者であって、そのなかにカトリック教を信じるヤスパースやガブリエル・マルセルを入れることができよう。第二は無神論の実存主義者で、そのなかにはハイデッガーやまたフランスの実存主義者、そして私自身を入れねばならぬ。この両者に共通な事は、『実存は本質に先立つ』と考えていることである。」(J.P.サルトル 伊吹武彦訳『実存主義とは何か』15頁)

この語句に対しては、『ヒューマニズムについて』(1947年)におけるハイ

デガールの批判がよく知られている。

「それに対してサルトルは実存主義の根本原則を以下のように表しています：実存は本質に先行する。その場合に彼はエクシステンティアとエッセンティアを、プラトン以来エッセンティアはエクシステンティアに先立っていると述べ続けている形而上学での意味で受け取っているのです。サルトルはこの命題を逆にします。しかし或る形而上学的命題をひっくり返しても、それは依然形而上学的命題に変わらないのです。」(GA9/328)

・042/29-042/30「この存在者がもっているそのつど私のものであるという性格」

「そのつど私のものであるという性格」の原語は Jemeinigkeit であり、これは先ほども触れた je (…ごとに、につき cf. je Kopf der Bevölkerung 住民一人あたり) と meinige (私のもの) からのハイデガーによる造語である。ちくま版、岩波版、河出版では「各自性」と訳されている。

なお Jemeinigkeit という表現は、HB (=R.ABast/H.P.Delfosse:Handbuch zum Textstudium von Martin Heideggers 'Sein und Zeit' 1) によれば『存在と時間』ではわずか5箇所が登場するだけである。当時の講義では、むしろ Jeweiligkeit が各自性を表すものとして使用されていることに注意しておく。Jeweiligkeit は jeweilig の名詞形であるが、weilig は weilen 「しばらく留まる」に由来する。(jeweilig, jeweils は『存在と時間』に「その都度」という意味で数十箇所使われているが、名詞 Jeweiligkeit は見あたらない。)

cf. 「現存在の存在の根本的な性格は、したがって次のような規定において初めて十分に捉えられているのである：各自的な - それで - ある Jeweilig-es-zu-sein において存在する存在者。この『各々の』je『その都度の』jeweilig もしくは『各自性』Jeweiligkeit という構造は、この存在者のすべての存在性格にとり構成的なのである。… (省略は筆者)

この現存在の存在構造に属しているのは、各自性 Jeweiligkeit そのものである。自分が『現存在で各々がある』daß ich es bin im >Es-je-zu-sein< ということのうちで現存在であるという現存在のこの根本性格によって、現存在

にとっての出発点となる規定が得られているのだが、しかし同時にまた最終規定が、つまりそこへとすべての存在分析が再び戻ってゆくような最終規定が得られているのでもある；つまり現存在のどのような存在性格もこの根本規定に貫かれているということである。それゆえ以下においてそうした存在諸構造が示されるとすれば、それらはすべて最初からこの根本性格の光の中で見られなければならないのである。」(GA20/206)

ただし全集第 63 卷『オントロジー』では *Jeweiligkeit* が頻出するが、そこでは(「本来性」の問題が前面にないこともあるせい)各自性というより主として時間的な「その都度性」という意味で用いられている。たとえば、

「この固有の現存在が、それであるのは、まさしくまたもっぱら彼のその都度の *jeweiligen* 『現』においてである。

その都度性 *Jeweiligkeit* の一つの規定が、今日 *Heute*、つまり現在に、その都度の自分自身の現在にその都度-滞在すること *das Je-Verweilen* である。」(GA63/29)

また *je* に関しては、「ナトルブ報告」の次の箇所も参照のこと。

「本来、各自の生であるはずの *je solches des Einzelnen* 事実的な生が、たいていのところ各自の生として生きられないのは、この墮落傾向のためである。」(NaB13 頁)

・042/35-042/36 「現存在はそのつどおのれの可能性であるのだが、現存在はおのれの可能性を¹かろうじて事物的存在者の固有性のように『もっている』のではない。」

ちくま版では「現存在はいつもおのれの可能性を存在しているのであって、それをただ客体的な属性として『持っている』というわけではない」、岩波版では「現存在はそのつど自分の可能性であり、しかも現存在はその可能性を、目の前にあるものとして、ただ性質的に『もって』いるのではなく」、河出版では「現有はその都度彼の可能性で有り、而も現有は彼の可能性を、或る直前に有るものとしてただ単に性質的に『もっ』ているのではない」と訳されている。

普通、可能性とは、「物事の実現する見込み、物事の現実の在り方（現実性）に対してできうる（ありうる、考える [=論理的に矛盾しない]、能いうる）在り方」を意味し、まだ現実には存在しない、そして現実化すればその可能性は過去のものとなり消滅してしまうような事態を指すわけである。たとえば常温での水は、今はそうではなくても0度になると凍るという可能性をこの物質の固有性としてもっている。

しかし現存在が可能性であるというのは、現存在が選ぶうる選択肢が論理的に矛盾がないから可能であるとか、今ある現存在が、たとえば将来仕事に成功ないし失敗する可能性をひめているといった普通の意味の可能性なのではない。現存在が可能性という在り方を持つとは、たとえばダイヤモンドが人手を加えない限りそのままの姿であり続けるのとは違い、関わる存在という特有の動的な在り方において可能性を実現ないし実現そこなっていくことができるとともに、単にある可能性の実現で完結するのではなく絶えず自分のありかたを選び取り新しい在り方へと超え出てゆくいわば力能としてあることを意味する。とりあえず「固定化されえず絶えず様々に変わりうる動的な在り方」と理解しておけばよいだろう。

こうした意味で原文では「可能性である」の「ある」が強調されていると思われる。つまりこの「ある」はAはBである、という繫辞の用法でAの性質Bを述語づけているのではなく、まさにAはBとしてあるというように現存在のかかわるといふ在り方の内容を言いかえたものといえる。したがってちくま版の訳がここでは適切と思われる。

なお可能存在ないし存在可能については、『存在と時間』第31節「了解としての現にそこに開示されている現存在」において現存在の能動的な在り方である「了解」の様相として詳しく説明されることになる。

cf. 「われわれは、ときとして存在的な言い方において、『或ることを了解する』という表現を、『或ることをつかさどりうる』、『それだけの力がありうる』、『或ることをなしうる』という意味で使っている。実存範疇としての了解においてなされうるものは、対象的な何かではなく、実存することとしての存在

なのである。了解のうちには、実存論的には、存在しうること Sein-Können としての現存在の存在様式がひそんでいる。現存在は、或ることをなすいうるということを添え物としてそのうえ所有している一つの事物的存在者なのではなく、第一次的に可能存在 Möglichkeitsein なのである。現存在は、そのつど、おのれがそれでありうる当のものであり、おのれの可能性であるとおりのものである。」(SZ S.143) (ちくま版では「了解においてなされうるものは」の箇所が、「了解においてなされうるものは」と強調されている。

・042/31-042/34「現存在はそのつど本質上おのれの可能性であるゆえ、この存在者は、おのれ自身を『選択し』、獲得することができるのであり、おのれを喪失し、ないしは、けっして獲得できなかつたり、たんに『外見上』獲得したりすることができるのである。」

いかにして自己喪失態から自分を取り戻すか、本来の自分の在り方を覚醒するかは、無論、存在論的解釈の脈絡からはそれる課題であるとはいえ、現存在の存在の意味の探求と一体となった『存在と時間』刊行部分の中心的テーマの一つである。

042/36-043/01「本来性と非本来性という二つの存在様態」

既に『存在と時間』第4節において実存のレベルで以下のように述べられていた。「現存在は、おのれ自身を、つねにおれの実存から、つまりおのれ自身であるか、あるいはおのれ自身ではないかという、おのれ自身の可能性から、了解している。この二つの可能性を現存在はみずから選んだか、あるいは、現存在はそれら二つの可能性のうちへとおちいつているか、それともそのつどすでにそのうちで成長してきたのかのいずれかである。実存は、それをつかみとるという仕方において、ないしはそれを逸するという仕方において、そのときどきの現存在自身によってのみ決定される。」(SZ S.12)

ここでは、そうした実存の二つのありかたが「厳密な語義において術語的に選ばれ」た**本来性** *Eigentlichkeit* および**非本来性** *Uneigentlichkeit* によって表現されることになる。*eigentlich* は「本来の、本当の」(ただし *uneigentlich* の「固有でない、本来的でない」という用法はまれであるという) という意

味であるが, *eigen* (英語の *own, cf. owner* 所有者)「誰かに所属する, 自分の, 自分からの」(派生的には「特有の, 特異な」)に基づく形容詞である。

なお「本来性」と「非本来性」という訳語は最初から「本当の, 真の」と「本当ではない, 偽の」といった意味を連想させてしまう。英訳本では *authenticity* (本物であること, 真正) および *unauthenticity* という強い含意をもつ語で訳されており, ますますそのように受け取られがちである (旧仏訳では *authenticité* と *in-authenticité* であるが, 新訳では *propriété* 所有, 固有性と *impropriété* であり, この方がまだ原義に近い)。

しかしすぐ続く章句にもあるように, ハイデガーは, この二分法的術語対は, あくまで各自性に根拠を持つ実存のいわば自拠的な在り方と非自拠的(ないし他拠的)な在り方という二つの存在の仕方の存在論上の違いのみを際立たせるための価値中立的な規定であり, 続く文からも明らかなように (少なくともこの段階では) 価値的優劣を読み込まないよう注意を促している。またこれら二つの在り方は現象と本質という関係でもないし, それぞれ独立してあるのではなく, カメレオンが皮膚の色を変えてもカメレオンには変わりがないように, 同じ実存が交互に取りうる変容態なのである (cf. SZ S.130.GA21/231)。

なお第 21 巻の該当箇所では次のように述べられている。

「そして現存在の非本来性は, これもまたより少ない存在とか, より低次の存在レベルを意味するのではさらさらない, むしろ非本来性は, 現存在が具体的に動いているところの彼の多忙さや活発な状態の中や, 興味, 楽しめることといった状態においてまさに充実した具体相における現存在を表しうるのである。」(GA21/229)

また注目すべきことに, ハイデガーは, 同じ第 21 巻で, 本来性にも非本来性にも, 真正なもの(本物) *Echtheit* と非真正なもの(偽物) *Unechtheit* があるとも述べている。非真正の本来性については, 他者を愛していてもそれは結局他者を愛している自分を愛しているというナルシズムや極端な引き籠もり状態を考えてみるとよいだろう。

「現存在の統一というこの現象の解明にとって重要となるのは、本来性と非本来性という上述の様相であるが、それらはさらに真正もしくは非真正という様相とクロスする。非真正な本来性というものが、つまり現存在の非真正な自己自身のもとに存在するということがあるし、真正の非本来性というものがあるのである、つまり当該の具体的な現存在から発生する自分自身の真正な喪失がである。」(GA21/226f.)

・043/16-043/19「この存在者を正しく前渡ししておくことが確実に遂行されるかどうか、この存在者の存在を総じて了解するにいたる可能性がかかっている。」

「正しく前渡ししておくこと」(ちくま版では「適切な仕方で定置する」、岩波版では「正しい優差を確実につけること」、河出版では「先与すること」)の「前渡し」の原語は Vorgabe (動詞 vorgeben 先に与える)である。普通の語義は「スポーツ試合で予め与えるハンディキャップ、予め基準として与えられたもの、基準値」といったものである。ここでは文字通り先与、予めの設定といった意味である。

この存在者の存在は、様々な在り方を取りうるのであり、存在の意味探求の糸口となる在り方もあれば、むしろそうした探求をふさいでしまうような在り方もある。しかし「この存在者の存在の問題性」は「この存在者の実存の実存性から展開」(SZ S.43)されなければならないのである。そこで「関わる存在、各自性」という事物的存在者には見られない実存性を何らかの形で保持しているような存在の仕方をまずもって先与された在り方として確保しておくこと、いいかえれば先理解に基づく一定の選択を行うことが分析の出発点においてとりわけ重要なのである。

なお岩波版の「優差」は、ハンディキャップからの連想であろうが、ここでは分かりにくい。

なお第63巻の以下の箇所も参照のこと。

「研究のテーマは、事実性、すなわち自分の存在性格を問い尋ねられているものとしての自分自身の現存在である。万事は、解釈学的解明の最初の設定

Ansetzen の際にすでにこの『対象』が、予め、つまりは最終決着的に、捉え損なわれるのではないことにかかっている。」(GA63/29)

・043/27-043/30「現存在は、分析の出発点においては、或る特定の仕方では実存する差別のすがたにおいて学的に解釈されるべきではけっしてなく、現存在が差しあたってたいてい無差別にとっているすがたにおいて暴露されるべきである。」

「差別」の原語は Differenz (英語の difference), 「無差別」の原語は Indifferenz (同じく英語の indifference) である (もととなる動詞 differenzieren は「区分, 細分する」の意味)。

現存在の分析は、出発点として、たとえば特定の実存の「何らかの可能的理念」(理論的認識主観, 人格など,) や、あるいは偉大な人物の人生 (cf. デイクルタイの芸術家, 思想家についての伝記的, つまり生記述的考察) など誰にでも通用するのではない在り方を (いわんやデカルトのコギトーの担い手としてのワレという理念などを), 実存の分析の糸口となるモデルとして選んではならない。

なぜならそれらは特定の (とりわけ理論的態度による, しかも伝統的存在論の存在観を前提とした) 先入見に基づくものであり (cf. 「理論的なものは脱生化されたものであり, それ自体超出してきたものである。」(GA56/57/96)), 初めから生き生きとした実存性を覆い隠すもの, 「飛び越してしまう」ものとハイデガーは考えるからである。そこでいわば特定の理論的解釈の汚染を受けていないような, 或いは特定の解釈以前の在り方が「前渡し」(先与) されるべき姿ということになるが, それが「無差別に取っている」在り方と呼ばれているのである。

とはいえ実はこの出発点の設定は, ハイデガー自身の実存理念 (cf. 『存在と時間』13 頁および「すべてのことが, たとえ臚げにせよ, 『前提された』実存の理念の光によってすでに照明されているのではなからうか」(SZ S.313)) による彼自身の予断による選択であることも忘れてはならない。

以下の関連箇所も参照のこと。

「さらに現存在は、存在するその仕方において了解されるべきなのである、しかもまず第一に必ずしも何らかの強調された例外的な存在の仕方においてではなしにである。現存在は彼の目標や目的の何らかの設定において受け取られるべきではない、『ホモ』としてでもいわんや『人間性』の何らかの理念の光においてもである。むしろ存在する仕方はその仕方の最も身近な日常性の中で、つまり事実的現存在は、彼の事実的な『それであること』のどのようにかにおいて、露わにされねばならない。だがこのことは、われわれが今やこの個人としての特定の現存在を彼の日常について伝記的に物語るということを意味してはならないのであり、むしろわれわれは日常の日常性を、つまり彼の事実性における事実 Faktum を求めようとしているのであり、それぞれの現存在の日常的なものをなのではない、むしろ現存在として各自性の日常性であること、このことがわれわれにとって重要なのである。」(GA20/207f.)

なお平均性が分析の出発点となることについては、学問以前の存在了解に関連してではあるが、すでに序論において何度も言及されていた。

cf. 「こうした平均的な漠然とした存在了解内容は一つの現事実である。」(SZ S.5)

「存在や現実性についてのきままな理念は、しかもそれがどれほど『自明なもの』であろうとも、現存在というこの存在者に構成的・独断的に持ちきたらされてはならず、そうした理念にもとづいて下図を描かれている『諸範疇』は、現存在に見さかひもなく押しつけられてはならない。現存在へと近づいて、現存在を解釈の様式は、むしろ、現存在というこの存在者が、おのれ自身に即して、おのれ自身のほうから、おのれを示しうるというふうに、選ばれていなければならないのである。しかもそうした様式は、この存在者が差しあたってたいい存在している状態において、つまり、この存在者の平均的日常性において、この存在者を示すべきである。」(SZ S.16) その他、SZ S.8などを参照のこと。

またこうした解釈の端緒の設定は、自然的というより理論的態度を無効に

しその侵入を防御するための周到に練られた戦術でもある。

・043/30-043/33「現存在の日常性というこうした無差別のすがたは、何ものでもないものなのではなく、この存在者の一つの積極的な現象性格なのである。こうした存在様式から出て、こうした存在様式のうちへと帰ることが、すべての実存することのありのままのすがたなのである。」

無差別のすがたは、各人の実存の特性をいわば捨象ないしぼかして得られた、日常的現存在一般の形式的規定である。それは決してのっぺらぼうな姿なのでも学的に意味のないものなのではなく、その中に実存性を読みとることのできる積極的な実存論的構造を持つものであり、各々の日常実存がどのような（具体的）形態を取ろうとも、結局は平均的な無差別の姿に支えられているというのである。

すでに触れたように、ハイデガーの考えでは、理論化は脱生化なのであり、生き生きとした事実的生（実存）を骨抜きにしてしまうのであった。そこでまず事実的生（実存）が、理論化による変形を被る以前に実践的な活動を行っているごく当たり前の一番身近にある日々の実存の在り方が、分析の出発点となるモデルとされるのである。そしてそうした普段の実存が普通に（無差別に）とっている在り方を表す形式的告示的な術語が、日常性（態）Alltäglichkeitなのである。

なお既に「各自性」の項でも言及したのだが、全集第63巻第6節（見出しは「彼のその都度性における現存在としての事実性 今日」GA63/26f）は、事実性の解釈の端緒を問題としているが、そこでは、現存在のあるがままの在り方は、みずからのその都度の（=各自の）「現」においてあることであり、そうしたその都度性の一つの規定が今日 Heute である（cf.「解釈の端緒は主題的对象そのものから一定の『今日』へと指示されている」）として、今日（現代という意味でもある）という概念が導入される。そしてこの今日について、それは「われわれの日々、それは日常性、埋没すること、世界のなかへ世界から語ること、配慮することである」という形で「日常性」概念が登場している。（同巻「第18節 日常性へのまなざし」「先持の仕上げにとっては、現

存在をその日常性において見ることが決定的に重要になる」も参照のこと。)・043/33-043/34「われわれはこうした現存在の日常的な無差別なすがたを平均性 Durchschnittlichkeit と名づける。」

Durchschnittlichkeit は、形容詞 *durchschnittlich* 「平均の、平均的な、並の、平凡な」(動詞の *durchschneiden* 真ん中の線で二つに分けるに由来) の名詞形である。(英訳、仏訳では、以下のような訳語が当てられている。averageness, être ordinaire et moyen, banalité quotidienné, quotidianité moyenne.)

平均的な在り方というのは、普通、同類の中でももっとも頻度の高い一般的な様をさすわけであるが、ここでは日常的現存在が(の)最も多く取っている在り方、つまりほとんどすべての現存在が同じような規範にしたがい同じようにものごとを理解しているという月並みで平凡な(という価値評価は不適切かもしれない、とにかく中間的という)在り方という意味である。

続く文章においてハイデガーは、日常と平均の両方の在り方をまとめて平均的日常性と呼ぶ。そうした普段の在り方は理論的態度にとってはあまりにもトリビアルなものとして、「飛び越えられて」、つまり取り立てて学問の対象とされることなく無視されてきたという。しかし様々な先入見以前のこの在り方こそが分析の発端において予持され解釈の主題とされねばならないのである。

cf. 「存在問題は、現存在自身に属している本質上の存在傾向の徹底化、つまり、前存在論的な存在了解内容の徹底化以外の何ものでもないのである。」(SZ S.15)

なお現存在の平均的な在り方については『存在と時間』第一篇第四章で詳しく扱われることになるのだが、おおよそどのような事態を指すのかは、「ナトルブ報告」の次の文を参照のこと。

「本来、各自の生であるはずの事実的な生が、たいていのところ各自の生として生きられないのは、この墮落傾向のためである。事実的な生は、むしろ気遣いや関わり合い、目配り、世界受容といったものの一定の平均性の中を

動いている。この平均性とは、その都度の公開性、回りの環境、支配的な風潮、『他の多くの人もそうしているのと同じように…』という平均性である。…（省略は筆者）生は世界に没頭し、平均性の中で様々に関わり合いをもって動きまわるが、その際、生は自らを自分自身に対して隠している。」(NaB13頁)

また『存在と時間』執筆期の講義の以下の箇所も参照のこと。

「以下の考察によって原則的に強調されなければならないのは、ここでは現存在それ自体の主題的な分析が与えられることになるのではないことであり、むしろ若干の本質的な根本諸構造一般がまず先持されていて、それらの方からもっと原則的に問うことが可能になるのである。現存在は彼の基本体制において、彼の平均的な了解内容において露わにされるべきなのであり、そうすることでわれわれは存在の間を透視的に立てることができるのである。」(GA20/204)

「ところで差しあたっては、この差しあたってが重要であるが、現存在は本来性の様相にあるのでも全くの喪失という様相にあるのでもなく、奇妙な無差別の中にある、この無差別はこれはこれで無なのではなく、積極的なものである：つまり現存在の平均性であるが、それをわれわれは日常性と呼ぶのであり、それはその構造と存在意味に関して範疇的に把握することがとりわけ困難なものである。」(GA21/229f.)（ここでは無差別性、平均性が、かならずしも非本来性とされていない点が興味深い。）

・043/37-043/39「存在的に最も近くて熟知のものは、存在論的に最も遠くて、認識されていないものであり、またその存在論的意義においてたえず看過されているものなのである。」

最も身近な在り方は存在論的解釈の源泉であるにもかかわらず、従来の存在論では顧みられてこなかったことについては、以下の文なども参照のこと。

「現存在は、なるほど存在的には、身近であるばかりではなく、それどころか最も身近なものですらある－…それにもかかわらず、ないしはそれだからこそ、現存在は存在論的には最も遠いものである。」(SZ S.15)

「現存在はおのれ自身に、存在的には『最も身近』で、存在論的には最も遠いが、それでも前存在論的には見知らぬものではない。」(SZ S.16)

また全集第20巻の関連箇所は以下の通りである。

「この研究テーマは、馴染みのない未知の事象なのではなく、逆に最も身近なものなのである：だがおそらくまさにそのために見間違いへと誘惑するのである。この存在者に関して露わとされるべき現象連関を絶え間なく覆い隠しているのは、まさにこの存在者を最も身近に知っていることに住み着いている見誤りと解釈間違いなのである。そしてまさにこの存在者がある点で探求者にとってとりわけ近くにあるかぎり、この存在者はいっそう容易に飛び越されてしまうのである。自明なものがまず可能なテーマとなることは全くない。見る方向の獲得と誤って導くような問いの除去が、第一に必要なものであり続けるがゆえに、まずは一度諸構造に最も身近な現象的基本連関を眼差しのうちに得ることへと迫らなければならないのである。」(GA20/205)

・043/39「アウグスティヌスが…」

この引用文は、全集第21巻211頁でも同様のコンテキストにおいてそのまま引用されている。

・044/08-044/20「平均的日常性のうちにも、また非本来性という様態のうちには、実存性の構造がアプリアリにひそんでいるのである。…現存在は、平均的的日常性という様態においてもこの存在へと態度をとっているのであり、たとえこの存在に直面してそこから逃避して、この存在を忘却するという様態においてだけにでもせよ、この存在へと態度をとっているのである。…それらの諸構造は、たとえば現存在の本来的存在の存在論的な諸規定と、構造上は区別されないかもしれない。」

ここでは、平均的的日常性という在り方が実は現存在の非本来的な在り方であることが示唆されているというか、明示されている。以下『存在と時間』第一篇第二章、第三章で詳しく分析されるように、平均的的日常的な現存在は、世界の様々なものに実践的配慮的に関わる存在であるとともに、またもっぱら自分以外のもの、世界のほうから自分を理解し他人支配のもとにあるとい

う点でネガティブな各自性を持った存在（非本来的な存在）として実存しているのである。

結局、ハイデガーは、現存在の存在の分析の出発点としていきなり本来性を選ぶのではなく、まずは非本来性を考察の俎上にのせるのである。本来的な在り方は（ハイデガーは既にその在り方の内実を承知しているのだが）、普段、これから明らかにされる様々な要因によって覆われており、事象に即した解釈の出発点とはなりえない。そのためまず非本来的な様態を解釈することで、「非本来的」な「関わる存在」、「非本来的」な「各自性」の諸構造を浮き彫りにし、まず本来性との緊張関係を明らかにし、それを踏まえて「本来的」な在り方に迫ろうとする戦略が取られるわけである。また理論化以前の日常的在り方を考察の第一の対象とすることは、既述のように従来 of 理論的態度による実存の把握の歪曲ないし無視を予防するための手だてでもある。

フッサールは現象学的還元 of 真意を表すべく次のように述べた。「普遍的な自己省察によって世界を再び獲得するために、われわれはまず一度、判断中止によって世界を失わねばならない。」（『デカルト的省察』）この言葉をもじるなら、ハイデガーのこの戦略に関してはこういえるかもしれない。「実存論的解釈によって本来的自己を再び獲得するために、われわれはまず一度、理論的態度 of 判断停止によって飛び越された生活世界に戻らなければならない」と。

平均的的日常性が、現存在 of 仮の姿などではなく、本質構造の一つであることについては、たとえば『存在と時間』序論 of 以下の箇所を参照のこと。

「存在をこのように主導的に見やることは、あの平均的な存在了解内容から生ずるのであって、この平均的な了解内容のうちでわれわれはつねにすでに動いており、だからこの平均的な存在了解内容は結局は現存在自身 of 本質機構に属するわけである。」（SZ S.8）

「この平均的的日常性に即して明らかにされるべきものは、気ままな偶然的な諸構造ではなく、本質上の諸構造であって、それら of 本質上の諸構造は、現実的 of 現存在のあらゆる存在様式のうちで、その存在を規定する構造であ

ることを終始一貫変えることはない。」(SZ S.16f.)

・044/21-044/22「現存在の分析論から発現して説明されたものはすべて、**現存在の実存構造に着目しつつ獲得されている。**」

この箇所がちくま版、岩波版、河出版はそれぞれ、「現存在の分析論において究明されるすべての成果」、「現存在の分析論から生じるすべての説明分枝」、「現有の分析論から発現する一切の解明された事柄は」となっている。

「説明されたものはすべて」の原語は Alle Explikate であり、ラテン語の explico (「開く、拡げる」から「説明する」の意へ) の完了分詞 explicatus (「解明された、明瞭な」) に由来し、河出版にあるように「解明されたもの」といった意味である。英訳では All explicata、旧仏訳では Toutes les explications、新訳では Toutes les notions explicatives である。

同様の使い方として、次の文を挙げておく。

「実存自身の本来的な存在をめざして事実性は、解釈学的な問いかけの投入によって先持へと据え置かれ、この先持からまた先持にもとづいて事実性は解釈されるのである；その場合に生じてくる概念的な被解明項 Explikate は、**実存範疇**と呼ばれる。」(GA63/16)

また「発現して説明されたもの」という訳であるが、「発現して」の原語は現在形なので「発現する(ところの)」の方が誤解を招きにくいと思う。ちくま版の「究明される」は意識過ぎる感がいなめないのでは。

なお HB によれば、Explikation は『存在と時間』に 40 箇所ほど登場するが、Explikate はこの一箇所のみである。

・044/22-044/26「それらのものは**実存性**にもとづいて規定されているゆえ、われわれは現存在の諸存在性格を**実存範疇**と名づける。実存範疇は、現存在とされるにふさわしくない存在者の諸存在規定から鋭く区別されるべきであるのだが、われわれはそうした諸存在規定を**範疇**と名づける。」

実存範疇の原語は複数で Existentialien (『存在と時間』では形容詞の existentiell と existential が区別され、前者が「実存的」、後者は「実存論的」と訳し分けられているが、その後者の名詞化されたもの) である。ちくま版

でも「実存範疇」、岩波版では「実存カテゴリー」、河出版では「実存疇」。原語に範疇という意味は含まれていないわけであるが、存在の最も普遍的な構造規定を表すという意味では従来のカテゴリーと同様の役割をもつが、しかしあくまで実存のみに当てはまる基本的な存在特徴を表すということで、意味を取って実存範疇と訳したものと思われる。実存範疇と範疇の峻別、ここにもハイデガー流の二分法的発想が見られよう。

ところで全存在に適用されてきた従来の範疇概念を、現存在以外の存在、事物的な存在に限定し、現存在の実存に適用される範疇を実存範疇として厳密に区別することは、筆者の知るかぎり初期フライブルク時代にはまだ明確には行われていないように思う。以下多少長くなるが、実存範疇登場までの経過を辿って見よう。

まず全集第 58 卷『現象学の根本諸概念』（1919/20 年冬学期）では、範疇という言葉は数度見られるが（71, 134, 144, 193 頁など）実存範疇という表現は使われていないし、続く全集第 59 卷『直観と表現の現象学』（1920 年夏学期）にも範疇、ないし範疇的は何度か出てくるのだが（114, 116, 118, 130, 136, 145 頁参照）、それらはナトルプの体験理論の解体を主題とする箇所では基本的には従来の伝統的意味で使用されており、実存範疇に相当する言葉はまだ登場していない。

次に、全集第 60 卷『宗教的生の現象学』所収の「宗教の現象学への入門」（1920/21 冬学期）においては、範疇論および範疇という表現が数度使われている。たとえば、

「ただし現象は形式的には *formaliter*（何ともスコラ的表現であろうか……筆者注）また対象である、つまり何か一般である。しかしこのことによって現象について本質的なことはなんら述べられていない；現象はそのことによって、現象が属していない領域に移動させられるのである。このことが現象学をきわめて困難なものにするのである。諸客観、諸対象、諸現象はチェス盤の上におけるように並置されえないのである。むしろまた諸対象のこのような体系化は現象自体にとって不適切なのであり、範疇論や哲学的体系は、

現象学から見れば無意味となるのである。」(GA60/35f)

この章句では、範疇論の範疇は従来の範疇を指し、範疇論も従来の存在論を指している。ところが同じ講義からの以下の引用では、従来の意味での範疇に対比して、新しい範疇、すなわち現存在の諸範疇が強調されていることが確認できるだろう。

「ひとは、事實的現存在の意味を今日の哲学の手段をもってして把握することはおそらく不可能なのではあるまいかという問いを立てようとしな。ひとは、どのようにしたら事實的現存在を根源的に解明できるのか、つまり哲学的に解明できるのかを問わない。それゆえ見たところここには、今日の哲学的範疇体系において埋めなければならない空白があるように思われる。けれども、事實的な現存在を解明することを通して伝統的な範疇体系の総体が爆破されることが、明らかになるだろう：それほどにラディカルに新しいものと、事實的な現存在の諸範疇はなることであろう。」(GA60/54)

全集第61巻『アリストテレスの現象学的解釈』(1921/22年冬学期)の第三部「事實的生」の第一章(GA61/84f.)は「生の基本諸範疇」(生の範疇ないし生の範疇論という表現自体はデイルタイに遡る)と題されているが、主に『存在と時間』の頽落分析に対応する生の動性の解釈がおこなわれており、生の関係意味としてゾルゲンという語もすでに登場する。ここでは範疇という表現が頻出するのだが、この場合の範疇概念はもっぱら事實的生に特有の動的な存在様式を表すために用いられている。見出しを拾うだけでも、たとえば「C. 生の関係意味における諸範疇」(GA61/100ff., この節では傾向、間隔、閉鎖、軽さなどの範疇が扱われている)、「E. 動きの諸範疇」(GA61/117f. この節においては反照と構築を中心にCで扱われた諸範疇がさらに動きの観点から取り扱われている)など。また「現象学的範疇」(GA61/86)といった表現も登場しているのである。

そしてそこで注目すべきなのは、事實的生という生きた動きの存在の諸範疇は、あきらかに最高類や普遍概念とは違う点の強調である。ハイデガーは次のようにいう。

「この連関で（世界が生という現象の根本範疇であるということ…筆者補足）『範疇』と言われる場合には、それは、その意味に従って現象をある意味方向で特定の仕方で、原理的に、解釈するもの、その現象を解釈項として理解へともたらすものをいう。どんな仕方でなのかは、後になって初めて明確に示すことが出来るが、解釈の根源的な意味についても同様である。…**範疇は解釈しつつ存する Kategorie ist interpretierend** のであり、もっぱら解釈しつつあるのである。しかも実存的な心遣い *Bekümmernung* において自得された事実的な生である。」(GA61/86f)

「(事実的生の…筆者補足) 諸範疇は拵えものでもないし或いはそれ自体での論理的諸図式の集まり、『格子細工』でもない。むしろ範疇は根源的な仕方で生自身において生きているのである。生においてあるとは、生に即して生を『形成する』ことである。」(GA61/88)

ここまでくるといわば従来の範疇という表現の衣が、躍動する体にもはや合わなくなっていることは明かであろう。そして実際にこの講義では、後半二箇所においてではあるが、「実存範疇」という造語が登場することになる。

「それゆえ解釈的に或る動きへと突き進むことが問題である。この動きは、生の**本来的動性**を形作っており、その中で、またそれによって、生は**存在する**のであり、したがって生は、そこから存在意味に応じてかくかくと規定可能となるのである。それは、そのような存在者がどのようにして真正に彼の自由になり、自得する所有の仕方の一つへともたらされうるかを理解できるものとする。(事実態の問題、キネーシス問題)。それによってカテゴリーの解釈のために根本意味の取り出しが獲得されるのだが、この意味からすべての**実存範疇 Existentialien** が解釈的にそれら自身の、そして関係的な意味を受け取るのである。」(GA61/117)

「閉鎖のなかで時熟したそうした返照 *レルツェンツ* によって導かれる先立て *Vorbauen* の、つまり予持の取り出しと取り上げは、それが事実的生自身を『本来的に』[**実存範疇 Existential** としての『本来的に』]については、事実態を参照せよ。] 逃すこと、逃しうることを目指すのである。その都度十分

な（欠乏－関連的！）自己自身を逃す可能性の形成，用意，保留は，生自身によってゾルゲへと取り上げられる。」(GA61/124)

さらに全集第 63 卷『オントロジー』（1923 年夏学期）では，以下のように広義の範疇概念と実存範疇概念が混在しているとはいえ，われわれはこの時期，実存範疇が範疇とはっきり区別されて術語化され終えたことを確認できるのである。

「現存在（事実性）がそれである彼自身の最も固有の可能性を，…（省略は筆者）**実存**と名づけることにしよう。この実存自身の本来的な存在をめざして事実性は，解釈学的な問いかけの投入によって先持へと据え置かれ，この先持からまた先持にもとづいて事実性は解釈されるのである；その場合に生じてくる概念的な被説明項は**実存範疇**と呼ばれる。」(GA63/16)（この文の一部は Explikate の説明の際にも引用した。）

「その存在論的性格に応じた，つまり事実性（実存）の在り方としての『今日』は，事実性の根本現象が可視的になっている場合にはじめて完全に規定されるのである：その根本現象とは『時間性』（範疇ではなく実存範疇）である。」(GA63/31)

「統一形成的なのは，外的な枠組みの秩序構造や秩序構造に関係づけられた『過程という性格』なのではなく，各自の決定的な方向保持におけるその都度の了解作用の在り方である。範疇はすべて，（弁証法的な…筆者補足）相互の関係においてや関係にもとづくのではなく，それ自体としては実存範疇としてあるのである。」(GA63/44)

「動性としての好奇心、…（省略は筆者）つまり自分を - 現に - 持つという仕方での現 - 存在の生の存在論的現象の一つの範疇的な根本構造。これによって同時に被解釈性の現象の存在論的構造が見えるようになる，つまり，最初はテーゼ的にのみ先与されただけだったものが，今やおのれの現象的証明の可能性を獲得するのである：つまり被解釈性の諸性格は，現存在そのものの範疇として，すなわち実存範疇として明らかになるのである。…（省略は筆者）そうした分析の中で飛び出てくる諸実存範疇に面前する中で，現存在は

見られなければならない。」(GA63/65)

cf.「存在や現実性についてのきままな理念は、しかもそれがどれほど『自明なもの』であろうとも、現存在というこの存在者に構成的・独断的に持ちきたらされてはならず、そうした理念にもとづいて下図を描かれている『諸範疇』は、現存在に見さかひもなく押しつけられてはならない。」(SZ S.16)

また『存在と時間』執筆時期の講義の次の箇所も参照のこと。

「この周囲世界的な距離の独特の変形－現存在の実存範疇としての脱・距離化と範疇としての距離－へと至るのは、まさにすでにしばしば挙げた脱世界化のプロセスを通してなのである。」(GA20/313f.)

「(伝統的な認識論、倫理学などにおいては…筆者注) 本来的に決定的な諸研究はこれまで行われなままなのである。つまりすべての具体的な分析に先立って進み、そもそもその諸ふるまいがとりわけ精査されるべき存在者をとにかくまず規定するような諸研究がなのである。たいていはひとは現存在の分析に際して諸範疇のうちを動いているのであり、それらの範疇はそのものとしては無差別的であるか、あるいは現存在に生来所属することの全くないような存在諸連関から汲み取られるのである。」(GA21/210f.)

また全集 21 卷第 37 節の見出しは「現存在の実存範疇としての時間－時間性と気遣いの構造。現前化としての陳述」(GA21/409) となっている。

なお「実存性」Existentialitätについては、『存在と時間』序論の以下の箇所を参照のこと。

「この存在論的構造に対する問いは、実存を構成している当のものを解釈し分けることをめざすのである。これらの諸構造の連関をわれわれは**実存性**と名づける。…(省略は筆者) この実存性をわれわれは、実存する存在者の存在機構と解する。」(SZ S.12f.)

これは蛇足であるが、昨今インターネットの検索サイトなどで記事、コンテンツを分野ごとに分類した見出しなし索引をカテゴリというが、このカテゴリもともとと哲学用語のカテゴリに遡るわけである。

・044/26-044/27「そのさい、範疇というこの表現は、その第一次的な存在論的意義において採用され堅持されているのである。」

ハイデガーの場合、範疇、カテゴリーはあくまでアリストテレス的伝統にのっとった「ロゴスにおいて様々な仕方でも語りかけられ論じあわれうる存在者のア・プリアリな諸規定」を指す存在論的概念なのであり、他の範疇概念、とりわけ近代以降の範疇概念、つまりカントの悟性の判断形式、認識論的意味での範疇と混同されてはならないのである。(なお周知のようにハイデガーは、カントの『純粋理性批判』を認識論としてではなく、存在論として解釈することとなるのだが。)

全集第22巻『古代哲学の根本概念』(1926年夏学期)の中のアリストテレスの範疇概念を扱った箇所では、ハイデガーは範疇があくまで存在論的タームであり、認識論的形式ではないことに触れ、次のように述べている。

「カタ・パントーン・ガル・ト・オン・カテゴリータイ、『存在は、すべてのものについて述べられている』。存在者が出会われる場合、とりわけ存在が了解され思考されている。存在は、最も普遍的な範疇である。だがそれは主観的な思考内容としての存在者や存在を意味するのではない、むしろレゲインは以下のことを意味するのである：存在者をそれ自身に即して『見せること』。諸範疇は、**存在者の存在**に関しての存在者の在り方であり、主観的な思考諸形式ではない、ついでながらカントでも範疇はそうしたものではない。」(GA22/156)

「範疇の概念は不確定的である。カントにならうなら：思考内容の秩序づけのための諸思考形式；思考諸形式として主観的；客観的内実への問い。カントにおいては諸範疇は、元来はこうした意味での思考諸形式とは無関係である。それらの意味にしたがえば、諸範疇は存在の在り方を意味する。存在の在り方を表すこの名前が陳述から、つまりロゴスから選び取られることは、注目に値することである。」(GA22/295f.)

また30年代に入ってから発言であるが、全集第33巻『アリストテレスの「形而上学」、第9巻1-3』(1931年夏学期)の以下の類似の発言も参照のこと。

「アリストテレスの諸範疇を問題にする場合、ひとはカントを引き合いに出すのが常である。もちろん彼はなんといっても諸範疇を『論理的に』判断形式の表から、つまり陳述作用の様々な在り方から獲得したのだった。しかしながらカントの場合とアリストテレスの場合では『論理的』と『論理的』（という同じ表現…筆者注）が別のことを意味しているだけではない。とりわけひとが見過ごすのは、アリストテレスが了解しているような諸範疇の或る根本性格である。しかもこの諸範疇の根本性格はまさしく今述べた箇所です。次のように呼ばれていた：カテゴリーアイ・トウ・オントス、『存在者の諸範疇』。…（省略は筆者）

いずれにせよ、このことによってすでに拒絶的にすでに以下のことが述べられたのである：『思考形式』としての、つまりわれわれがその中へと存在者を詰め込むような何らかの容器としての諸範疇という通常の表象は的を射ていないのである。」（GA33/7）

・044/33-044/36 「存在者を論じあう [ロゴス] ときには存在をそのつどすでに先行的に語りかけているということ、このことがカテゴリーイスタイなのである。このカテゴリーイスタイは、差しあたっては、公に訴える、誰かを何かについて万人の前で面責するということを意味する。」

ちくま版の訳では、「存在者について語る言説（ロゴス）のなかには、いつでもすでに、存在を呼びとめる呼称が含まれている。この呼称がカテゴリーイスタイということなのである。このギリシャ語は、差しあたって、公訴すること、皆の前でだれかに何事かを面責することを意味する。」

岩波版の訳では、「存在するものについて語ること（ロゴス）において、すでに予め存在に話しかけることが、カテゴリーイスタイです。この語は差しあたり [法廷用語として] 『論告する』、（何かについてみなのみえで或る人を面責する）、といった意味です。」

また河出版では「あるものについて論ずることのうちでその都度既に先行的に有を語りかけているということ、このことがカテゴリーイスタイということである。このことは差しあたって、公開的に告発するとか、万人の前で

ある人にあることを否応なしに〈彼のこととして〉言い渡すということの意味している。」

英訳では、In any discussion (logos) of entities, we have previously addressed ourselves to Being; this addressing is kateegoreisthai. This signifies, in the first instance, making a public accusation, taking someone to task for something in the presence of everyone.

フランス語の旧訳では、L'interpellation préalable de l'être dans le discours (logos) sur l'étant est le kateegoreisthai. Ce mot veut dire primitivement: accuser publiquement, imputer quelque chose à la face de tous.

新訳では、Cette façon d'aborder chaque fois déjà l'être en discutant (logos) de l'étant est le kateegoreisthai. Ce mot signifie tout d'abord: porter une accusation publique, s'en prendre à quelqu'un en face en soutenant devant tout le monde qu'il a fait quelque chose.

ハイデガーはカテゴリーの基づく動詞カテゴリーレイスタイが、存在論的な意味では存在者の存在への先行的な語りかけであると述べた上で、カテゴリーがもともとロゴスと深く関係することを示すために、(従来の意味の)カテゴリーレイスタイに言及するのである。(なおここでは能動相の不定詞カテゴリーレインではなく、中動・受動相の不定詞カテゴリーレイスタイが使われているのだが、これは『存在と時間』32頁の中動相不定詞アポパイネスタイと呼応させているのであろうか。)

本文に戻って「差しあたり」の原語は *zunächst* である。ちくま版、岩波版、河出版は、それぞれ「さしあたっては」、「さしあたり」、「差当たって」である。*zunächst* には、「差しあたり、当面、今のところ」という意味のほか、「先ず第一に、当初は」という意味がある。ここでは存在論的に転用される前の普通の語義を問題にしているのであるから、「第一には、もともとは」の方が適切と思われる。英訳、仏訳でもそのように訳してある。また「面責する」の原語は、*auf den Kopf zusagen* であり、「誰かに対し(否定的なこと、個人的なことを)ずばり指摘する」という意味である(結果としては面責にな

るわけではあるが)。

周知のように日本語の「範疇」は、明治時代に井上哲次郎が、『書経 洪範』の「洪範九疇」に基づいて部門、分類、種類の意味のカテゴリーの訳語として作った和製漢語である。洪範とは殷の箕子(紂王の叔父)が周の武王に教えた天地の大法、九疇(疇はもとは畠のうねを指し、分類されたものの意味)とは、同じく箕子が周の武王のために述べた天下を治める九つの大法を意味したという。だから範疇という漢語からは、大きな決まり(最高類)というニュアンスは感じ取れるが、ロゴスとの関連が見えてこない。

ハイデガーの本文における指摘を待つまでもなく、もともとカテゴリーアは、動詞カテゴリーインに遡る。この動詞は「非難する、責める」という意味であるが、法律用語としては「告訴する、告発する」という意味で使われた。(kata = に対して + agoreuo = 公に語る。このアゴレウオーにはボリスの中心である公共の広場、集会場として政治弁論などが行われ、ソクラテスも対話を行った「アゴラ」という言葉が含まれている、まさに公の場で語ることである。)この動詞はさらに「示す、明らかにする」の意味でも使われた。

また名詞カテゴリーアは、「非難、告訴、告発」の意味を持つ言葉である。(cf. 告訴人はカテゴリーロスであり、プラトンの『ソクラテスの弁明』の有名な出だしのセリフ「アテナイ人諸君、諸君が私の告発者の弁論からはたしていかなる印象を受けたか、それは私には分からない」の「告発者」もカテゴリーロスの複数形である。)

本文のこの箇所に対応する講義内容は全集第20巻、第21巻には見あたらないが、アリストテレスの基本的諸概念の解釈を通して、そうした諸概念の基礎には相互に話しかけあう世界-内-存在としての現存在があることを明らかにし、とりわけキネシスを動性として際立たせようとする全集第18巻所収の1924年夏学期の講義『アリストテレス哲学の諸基本概念』には、カテゴリーについて(ここでは実存範疇という表現は使用されていないが)次のような記述がある。

「これまでの考察の中ではもちろん意図せずにはなしに、最初から現存

在および概念的なものの解釈においてロゴスが強調された：それは世界-内-存在の在り方としてのロゴスであり、この在り方は世界の被発見性、被暴露性、つまり現前存在を構成するというようにある。ここで『カテゴリー』と呼ばれているものは、ロゴスと最も近い親類関係にある表現により表されているのである、つまりカテゴリーは、レゲインと最も緊密に関連しているのである。アゴレウエインは、ただ『何かについて語る』とか『陳述する』といった単純なことではなく、『市場で語ること』、『公的に語ること』なのであり、そこは相互存在が生じている場であり、誰もがそれを理解している現（場）なのである。カテゴリーは次のことを意味する：『公開の場で誰かに何かを面と向かって言うこと öffentlich einem etwas auf den Kopf zusagen』、つまり彼はかくかくの人物であるといつて、彼を『告発すること』、ある一定の行為を『咎めること』である。カテゴリーは、私がオンのカテゴリーについて話すかぎり、存在者にいわば面と向かって話しかける auf den Kopf zu ansprechen そうした話すこと Sprechen である、それは、その存在者について、それがかくかくのものであること、つまりそれが存在すると述べるように話すのである。カテゴリーは：存在者にその存在の点で話しかける仕方。つまり諸カテゴリーとは、根本的な在り方であり、そうした在り方の中で現存在しているものが特定の現存在諸可能性と在り方に関して暴露されて現にあるのである。このことは、諸カテゴリーがごく普通の発話にとって、つまり日常のロゴスにとって既に表現的に（明確に）あることを意味しはしない。むしろ事情はこうである、つまりあらゆるレゲインは既に一定の諸カテゴリーの中で動かされ導かれているのである。それらは、私がある体系へともたらしうるような何らかの諸形式を意味するのでも、諸命題の区分原理を意味するのでもなく、それらは、その名が意味するところにしたがって、ロゴス自身がその卓越した在り方においてあるところのものから理解されねばならない。卓越した在り方とは、被発見性が世界をその根本的諸観点において示すように、世界が発見されていることを構成しつつあることである。…』

(GA18/303)

「カテゴリーア：特定の種類の話すこと。諸カテゴリーとは、目立たないかたちで各々の具体的なロゴスにおいて見出しうるような示しつつ話す仕方である。レゲインとしてのロゴス－レゴメノンとしてのロゴス。カテゴリーアもまたこの二重の意味をもつ。」(GA18/304)

またこれは後期思想の文脈での発言であるが、全集第55巻『ヘラクレイトス』所収の1944年夏学期の講義「論理学、ロゴスについてのヘラクレイトスの教説」の以下の類似箇所も一応挙げておく。

「ギリシャ語のカテゴリーアは『陳述』を意味するが、しかもこの語が陳述を意味するのはその語幹とつながりにしたがえば、ロゴスという語よりもずっと早くかつ本来的にである。カト-アゴレウエインとは：公的に、市場や裁判の集会において誰かに対して彼がその責めを持ち彼がその原因であるような何かを認定することであり、その結果この言い渡しとしての認定は、告訴もしくは犯罪構成要件を告知することになるのである。カテゴリーアは、明らかにしつつ告知しつつもに行う言い渡しの意味での陳述である。」(GA55/255)

またハイデガー『ニーチェⅡ』（1961年）71頁以下「諸範疇としての最高の諸価値」における発言も参照のこと。

・044/36-044/38「存在論的に言いかえれば、この術語は、存在者がそのつどすでに存在者として何であるかについて、存在者をいわば面責するということである、すなわち、存在者をその存在において万人にとって見えさせるということである。」

「存在論的に言いかえれば」の原語は、Ontologisch verwendetである。動詞 verwenden は、「使う、利用する」の他に（cf.wenden ひっくり返す、向きを変える）「目を転じる」という意味がある。ここでは単に存在論的にパラフレーズしたのではなく、法廷用語としてのカテゴリーの原義が、「存在論のコンテキストで使用されると」ということだから、「転用すると」といったニュアンスである。（周知のようにアリストテレス哲学の基本タームである、「質料」ヒュレー、「実体」ウーシアなども、もともと日常のギリシャ語だったの

であり、前者は森林、材木、後者は所有物、財産の意味である。)ちくま版では「存在論的にもちいるときには」、岩波版でも「存在論的に用いられると」、河出訳では「有論的に転用されると」である。

そこで存在論への転用であるが、アリストテレスは、この言葉を、存在としての存在の意味の探求の中で特殊哲学的な意味で用いるのである。普遍的なものが感覚の世界とは独立に存在するというプラトンのイデア論を批判するアリストテレスの考えでは、それ自体で存在するのは、個物、ないしは主語となって決して他のものの述語とならないもの(基体ヒュポケイメノン、第一実体)である。

cf.「最も基本的な意味で、また第一義的に、とりわけて『実体』と呼ばれるのは、或るものを基体(主語的存在)として、これに述語付けられるものでもなく、また、或るものを基体として、これにおいて或るものでもないというのが、それである。たとえば、『この或る人間』とか、『この或る馬』といわれる場合である。他方、第一義的に実体と呼ばれるものが、そのうちに属する『エイドス』種とか、またさらにそれらの種の属する『類』ゲノスが『第二実体』と呼ばれるのである。」アリストテレス『カテゴリー論』2a11-16(松永雄二訳 世界古典文学全集16巻所収)

そうした個物については、それが何々であるという述語づけ、カテゴリーが行われるが、この述語形態はそれ自体で存在することはできず(主語となりえず)、常に基体についてそのあり方を表現する非独立的なものである。

たとえばソクラテスという名の主語について、「彼はアテナイ人である」、「ソクラテスは一番賢い」、「彼は眠っている」、「彼はクサンティッペの夫である」、「ソクラテスはソフィストを批判する」、「ソクラテスは告発された」等々様々な述語づけが行われるが、これらの述語は主語を欠いては意味をなさないわけである。

ところで具体的には述語は無限にあるともいえるのだが、それらはいくつかのタイプに分類することができる。そこで具体的内容を捨象してタイプの相違だけに注目した場合に得られる最も普遍的(形式的)で基本的な述語タ

イブ、諸個物に共通してそれらの在り方を特徴づける基本規定がカテゴリーアと呼ばれるのである。だからカテゴリーアは、述語ないし述語形態と訳す方が原意に即しているし、最近の古代ギリシャ哲学関係の文献でも、述語、述語形態という表現が普通である。

周知のように、アリストテレスは、他に還元できないそうした最も普遍的な述語形態として以下の十のカテゴリーを挙げた。

「いかなる結合もなしに語られる、もの(有)の各々は、次のいずれかを示す。1(第二…筆者注)『実体』ウーシア(何であるか=本質規定)を、2『量』ポソン(どれだけであるか)を、3『性質付け』ポイオン(どのようであるか)を、4『関係』プロス・ティ(他に対してどうあるか)を、5『所』プー(どこにであるか)、6『時』ポテ(いつであるか)を、7『状況』ケイスタイ(どうしているか)を、8『所持』エケイン(持っていること)を、9『能動』ポイエイン(なすこと)を、10『受動』パスケイン(なされること)を、である。

－ところで、まず概括的に述べるならば、実体とは『人間』とか『馬』という場合であり、量とは『二尺』とか『三尺』という場合であり、性質付けとは『白い』とか『文法的な』という場合であり、関係とは、『二倍』とか『半分』とか『より大きい』という場合であり、所とは『リュウケイオンにおいて』とか『市場アゴラにおいて』という場合であり、時とは『昨日』とか『去年』という場合であり、状況とは、『横たわっている』とか『坐っている』という場合であり、所持とは、『下履をつけている』とか『武装している』という場合であり、能動とは、『切る』とか『焼く』という場合であり、受動とは、『切られる』とか『焼かれる』という場合である。」アリストテレス 同書 1b25-2a4, 『トピカ』 103b20 以下も参照のこと。

(なおこれらのカテゴリーは、互いに他に還元されえない独自性を持つのだが、しかし類比によって存在に結びつけられているといわれる。[cf.「共直前性の在り方, a) 相互に異なっており、還元不可能, b) 最高類の下にはあるが、しかしまとまりを欠く多様でもなく、むしろそれらは、ウーシアへの関係性による諸範疇である、ウーシアは 1. それらすべてのものに実質的であり、2.

それぞれにおいては異なっている。」(GA22/159)] なおこの範疇の統一性の問題は、多様に語られる存在の意味の統一性の問題でもあり、ハイデガーを存在の間へと誘った問題でもあった。cf. 全集第22巻「第56節 『範疇』の本質」「第57節 種々の在り方(範疇)の単一性のための存在論的意味としての類比(プロス・ヘン)」。また範疇の存在様式の解釈、検討に大部分がさかされているブレンターノの博士論文『アリストテレスにおける存在の多様な意味について』も参照のこと。

いずれにしてもハイデガーは、範疇としてのカテゴリーアは、ロゴスの一つの在り方である告訴としてのカテゴリーアが被告の罪状を暴くのと同様に、学的ロゴスにより露わとされる存在者の存在のアプリオリな諸規定を意味するということである。ハイデガーの用いる存在論的な実存範疇および範疇概念とはニュアンスが異なるが、範疇は直接直観に与えられるとするフッサールの「範疇的直観」の考えをハイデガーは「現象学の決定的な三つの発見」の一つとして高く評価していたことも、この文脈において忘れてはならないであろう。(GA20/64ff.「第六節 範疇的直観」を参照のこと。)

また既に本注解(5)において引用した次の文も参照のこと。

「哲学が自分の探求をどう行うかと言え、それは、この存在意味をその諸々の範疇的な構造に向けて、すなわち事実的な生が自ら時熟し、時熟しつつ自分自身と話す(カテゴリーレイン)その各様態に向けて解釈する、という仕方においてである。」(NaB 16頁)

なお『存在と時間』がほぼ完成していた1926年夏学期の講義である全集第22巻『古代哲学の根本諸概念』の第三編「アリストテレス哲学」では、アリストテレスの範疇について詳しい説明が行われているが、その中から二箇所ほど挙げておく。

「名としてのカテゴリーアという表現は、『見えさせること』Aufweisungとしてのロゴスとの関係を示している。だが、その本質にしたがうならば、諸範疇は存在の在り方を意味するのである。存在の在り方が陳述に関係している一つの名によって呼ばれるのは、どのような事情によるのだろうか。そ

れがそうであるということは、もはや不思議なことではない：存在についての間は、ロゴス『見えさせること』に定位している。もっと正確には：ロゴスは**存在者**を見えさせることであり、ロゴスのうちで存在者は**接近可能 zugänglich**となるのであり、それとともに**存在**もなのである。」(GA22/156)

「諸範疇は『実在的な概念』なのではなく、その中へとあらゆる実在的な概念が登録されるべき枠組み Fachwerk なのである！…（省略は筆者）事物がその現実の諸性質に関してその中に記述されるのではないし、いわんや確定した類概念（ゲネー！）などではない、むしろ**諸類一般の可能性の制約**がなのである。質、量は実質的なものなのだろうか。否であり、むしろ**実質的なもの一般の構造**なのである！

最も普遍的な諸述語の意義とは？カテゴリーアイ・トウ・オントス（オンという範疇）は、第一に陳述と陳述の諸要素に関係するのではなく、オンにである。なるほど、だがどのようなのか。オン－レゴメノン－デルメノン（存在－語られたもの－露とされたもの）。存在一般の様相：ト・ド’オン・ト・メン・トデ・ティ、ト・デ・ボソン、ト・デ・ポイオン・ティ・セーマイネイ（存在は、ある場合には個体を、ある場合にはどれだけという量を、あるいは性質を意味する）。というのも存在者はロゴスにおいて**発見**されているからである。このようなものとして諸範疇は、可能なまなざしの土台であり、またそのまなざしは何であるかとしての可能なものの具体的な理解のための導きの糸なのである。存在者はロゴスにおいて**接近可能**である。したがって存在諸性格がカテゴリーアイなのである。」(GA22/197f.)

なお以下は先にも挙げた全集第33巻の導入部からの引用である。後期思想への過渡期にあたるこの講義では、「見えさせること」から「集めつつ明らかにすること」へというようにロゴス（存在）概念には大きな変化が見られるのだが、『存在と時間』での記述と似た形でカテゴリーインを説明している箇所として参考までに載せておく。

その導入部では、カテゴリーについてのアリストテレスの説明が取り上げられているが、そこでハイデガーは、諸々のカテゴリーを第一のカテゴリー

(ウーシア)に関連づける遡源的な関連づけが、ロゴスにおける語ることとして生じることを指摘する。そしてカテゴリーは単にロゴスの中に現れるだけでなく、本性上、ロゴスのうちに故郷をもつことから、カテゴリーがカテゴリーと呼ばれる所以も理解できるものとなると述べて、カテゴリーとロゴスの関係について以下のように説明している。

「カテゴリーとは、告発すること、責めることという意味である—つまり第一に任意の陳述ではなく、強調的で際立たされた陳述—誰かに対して犯行などをずばりと指摘すること *einem etwas auf den Kopf zu sagen* (原文では *zusagen* ではなく *zu sagen* と *sagen* の不定詞となっている…筆者注) である：彼はかくかくしかじかの人間だ、彼はしかじかの立場にある。事象や存在者一般に転用する *übertragen* ならば、存在者が一体そもそも何であるのか、その存在者はどんな状態にあるのかを強調された意味で述べる言明である：つまりカテゴリーとは、そのように話されたものであり話しうるものである。ロゴスのなかに諸範疇が根をもっているとすれば、それは以下のことを意味するのである：何かについて何かを話す任意の陳述のいずれの中にも、存在者が、いわばしかも正当にも、その存在者が何であるかということに向かって告発されているような傑出した陳述が含まれていること。…(省略は筆者による) だが彼が強調的な意味で『諸範疇』と呼ぶものは、あらゆる陳述において(たとえ明確に語り出されていないにしても) 支配的な仕方で語りつつ関与しているものなのである。」(GA33/6)

・045/06-045/07「すなわち、存在者は誰か *Wer* [実存] であるか、あるいは何か *Was* [最も広い意味での事物的存在性] であるかなのである。」

現存在が誰なのか、現存在が各自性を特色とする以上、これは自明のように見える。しかし果たして私は本当に私であるのか、とくに日常性における各自性の姿、いわば存在論的次元での自己同一性の問題は、『存在と時間』第一篇第四章で詳細に扱われることとなる。

cf. 「そのつど世界-内-存在という仕方において存在している存在者。この存在者でもって探求されるのは、われわれが『誰か?』というかたちで問い

たずねるものである。現象学的証示においては、現存在の平均的的日常性という様態において存在しているものは誰であるのかが、規定されるにいたるべきである。」(SZ S.53)

・045/10「序論においてすでに暗示されていたとおり…」

「存在一般の意味を学的に解釈するための地平から邪魔物を取り払うこととしての現存在の存在論的分析論」という見出しの『存在と時間』序論第5節では、存在の意味の探求に際して、いきなりその仕事にかかれるわけではなく、「現存在へと近づく通路の主導的な様式を獲得し安全にする」(SZ S.16)のために、まずその根本構造をむしろ覆い隠している既存の存在理解をまず追いつく必要があることが既に強調されていた。(したがって *anduten* の訳は、「暗示」より「示唆」の方が適切ではないだろうか。岩波版でも「暗示」、ちくま版、河出版では「示唆」である。)

「この分析は、現存在というこの存在者の存在を、この存在の意味を学的に解釈することはせずに、やっと引き立たせるにすぎない。むしろこの分析は、最も根源的な存在解釈のための地平から邪魔物を取り払うことを準備すべきなのである。」(SZ S.17)

「存在はそのつど時間に着目することにもとづいてのみ捕捉されるものとなるゆえ、存在問題に対する答えは、何らかの孤立した盲目的な命題のうちにはひそんでいることはできない。…(省略は筆者)はたしてその答えが『新しい』かどうかは、重要なことではなく、外面的なことにとどまる。その答えで見られる積極的なものは『古人』によって用意された諸可能性を概念的に把握することを学ぶに足るほど、その答えが古いということ、このことのうちにはひそんでいなければならない。その答えは、その最も固有な意味から言えば、邪魔物を取り払われた地平の範囲内で根本的に探求しつつ問うことを開始すべしと、具体的な研究にとって一つの指令を発するのであり—しかもその答えはそうした指令だけを発するのである。」(SZ S.19)

存在の意味の探求の地平を開くための邪魔物となるものは伝統的な存在論を中心として多々あるわけであるが、ここでは、とりわけ現存在の平均的日

常的な存在構造の探求に際しての邪魔物として従来の人間の理解が阻上にあげられる。ハイデガーは、その存在論的限界を明らかにし、自分の実存分析を当時シェーラーが提唱していた「哲学的人間学」の一種とする誤解を払拭する必要を述べるのである。

これまで見てきたように、第9節では当面の「現存在の分析の主題」（第9節見出し）が、現存在の平均的的日常性というあり方であり、しかもこの主題の分析は、あくまで種々の人間理解に先行する現存在のアプリオリな存在構造の解明をめざすものであることが示された。しかしこの探求はやはり現存在（人間、しかもありきたりの人間）を主題としていることから、外部からは従来の伝統的な人間理解に基づいた人間学的諸探求の一つと見なされるおそれなしとはいえない。

実際フッサールが『存在と時間』を新たな哲学的人間学の試みと理解したことや、『存在と時間』が刊行当時「実存哲学」の書と受け取られたことについては本注解（1）でも触れておいたのだが、そうした誤解を斥けるために、あるいはそうした人間理解の混入ないし伝統的あるいは常識的な人間理解に基づく怠りを防ぐために、とりわけ事物の存在とは異なる現存在の在り方を根源的に問うことのない従来「人間学、心理学、生物学」など人間に関する様々な個別科学と、現存在（人間の存在）を主題とする実存論的分析論との違いを鮮明にする必要があること、つまり既存の人間理解という「邪魔物」を一掃することが次の仕事としてここでアナウンスされているわけである。

そこで（様々な領域の存在論に対する基礎的存在論の優位、先行性についてはすでに序論で述べられていたが [SZ S.11 参照]）続く第10節では、具体的な現存在の解釈に先立って、まず従来「人間学ないし人間の存在理解（とりわけフッサールやシェーラーなどの人格主義）」に絞って批判的検討がなされ、その限界が指摘されるのである。そこで明らかになるように、結局、現存在のアプリオリな構造の理解を妨げる邪魔物としての人間の諸規定は、人間の存在の意味の問いに対し無頓着ないし不徹底な伝統的な人間観（人間＝「理性的動物」）に帰着するということになる。以下、ハイデガーの現存在解

釈は、人間の存在の本来の構造を訣摘するために、理性的動物という人間規定を源泉とする従来の人間観のアンチ・ヒューマン的な(?)解体作業でもある。

なお次の第10節との関連で、ここでは『存在と時間』序論の以下の箇所も参照のこと。

「哲学的心理学、人間学、倫理学、『政治学』、作詩、および歴史記述は、そのつど異なった方途で、また規模を変えながら、現存在のもろもろの態度、能力、力量、可能性、および運命に専念してきた。だが、果たしてこれらの諸解釈は、それらがおそらく実存的には根源的であったのと同様に、実存論的にも根源的に遂行されたのかどうかという、この問いは残る。…(省略は筆者) 現存在の諸根本構造が、存在問題自身に明示的に方向を定められつつ、十分に際立ったものとなっているときにはじめて、現存在解釈のこれまでの収穫はおのれの実存論的是認をうけるであろう。」(SZ S.16)

「この分析論は現存在の完璧な存在論というものを与えようとすることはできないのであって、そうした完璧な存在論は、『哲学的』人間学といったようなものが哲学的に十分な土台の上に置かれるべきであるなら、言うまでもなく完成されていなければならない。一つの可能的な人間学、ないしはその存在論的基礎づけをめざすという意図においては、以下の学的解釈は、たとえ非本質的ではないとしても、ただいくつかの『断片』を与えるにすぎない。」(SZ S.17)

(続く)

